

# こころの玉手箱 2月号



## 『風を切って走りたい!』

女性は片方の足が不自由で普通の自転車には乗れないのです。しかし女性がこの手作り自転車のペダルを踏むと、ぐんぐんスピードをあげ走り出しました。「まさか私が風を切って走れるなんて!」と女性は涙ぐみました。「私の作るものでこんなに喜んでもらえるなんて」と堀田さんも心をゆさぶられました。

### ☆ 1年生 ☆

- ☆ 周りに断られても、自分がやるしかないと自転車を作っていてすごいと思いました。私も自分がやらないとという意識で周りを引っ張れるようになりたいと思いました。
- ☆ あるきっかけで、堀田さんはもうやめようとしていた自転車作りを、困難があっても頑張り続けていてすごいと思いました。自分もすぐにあきらめるのではなく、もうちょっと頑張ってみようと思いました。
- ☆ 自分の生活を削ってまで、自転車を作りつづけていた堀田さんがつくっているものは、とても暖かいと思いました。お客さん一人一人に寄り添い、想いがこもった自転車を作れるのは堀田さんの強い意志があるからこそだと今日思いました。

### ☆ 2年生 ☆

- ☆ 今では当たり前のようにある障害者や難病の方のためのいろんな道具。たった一人の「作ってみたい」という意志が世界に認められるのはすごいなと思いました。作るだけでなく、乗れるまで指導するのも製作者として責任があるのだなと思いました。
- ☆ 体の不自由な人たちにも自転車に乗って欲しいという強い気持ちがあったからこそ、もうけが少なくても続けていられたんだと思いました。もうけより使う人の気持ちを第一に考えられるのがすごく思いやりのある人だと思いました。
- ☆ 体が不自由な人のために、お金がなくなっても、自転車を作り続けるというのはすごいなと思いました。将来働くときに仕事の意味や重さを理解して働きたいです。

### ☆ 3年生 ☆

- ☆ どんなに大変な目にあってもこの仕事を辞められないと思えることがすごいなと思いました。それほどやりがいがあるのかなと思いました。私はそろそろなりたい職業をはっきりと決めたいと思っています。私も堀田さんのようにどれだけ辛いことがあっても辞めないと考えるような仕事に就きたいです。
- ☆ 小さい頃の物心が大きいものにつながっているなと思いました。人の為に自分ができることを考え、それを実行できる人になりたいです。今も、堀田さんの自転車が認められているのはすごいことだと思いました。
- ☆ 自転車を作り始めたころは、ほぼもうけがなくて、断られたにも関わらず、自分のためだけではなく、他の誰かのために40年も働いていてすごいなと思いました。

### 保護者の皆さんへ

お子様と意見を交換して、感想などをお気軽にお寄せください。

----- 切り取り線 -----

保護者返信欄 (お子さんを通じて担任までお渡し下さい。)

## 朝の道徳 R4 2/17 資料： 『 風を切って走りたい！ 』 C-13

堀田健一さんは1943年茨城県で生まれした。子どものころ「自分で何でも作ってみたい！」と思い、小学校の近くにある自転車店をのぞいているうちに、自転車のしくみを自然と理解しました。また近くに製材所、ラジオ店、鍛冶屋などいろいろな工場があり、小学校の帰りに必ず立ち寄り、働くおじさんたちをじっと眺めていました。こうしたものづくりの基礎を学んだのです。高校は工業高等学校機械科に進み、卒業後はオートバイやエンジン生産で有名な本田技研工業株式会社に入社しました。その会社で長年の自分の夢だった水上オートバイを作りたいのですが、申し出を断られ、会社を辞めました。当時、彼のアイデアは時代の先を行きすぎているのかもしれない。

その後、東京に移り住んで、運送会社に入って働いていました。ある日、小2になる息子さんが、「自転車に乗りたいけれど、学校では禁止されている。三輪車ならいいけれど、もう大きいから三輪車は乗らない。」と言うのを聞き、堀田さんは一人で設計し、息子さんが乗れる大きな三輪車を手作りしました。

ある日、堀田さんが息子とこの手作り自転車で遊んでいると、杖をついた女性から「私もこの自転車がほしい、どこで買ったんですか？ 自分もその自転車に乗ってみてもいいですか？」と声をかけられました。この女性は片方の足が不自由で普通の自転車には乗れないのです。しかし女性がこの手作り自転車のペダルを踏むと、ぐんぐんスピードをあげ走り出しました。「まさか私が風を切って走れるなんて！」と女性は涙ぐみました。「私の作るものでこんなに喜んでもらえるなんて」と堀田さんも心をゆさぶられました。息子さんの自転車は、福祉施設に寄付されました。堀田さんはいろいろな人から、「自転車を作ってほしい」と頼まれるようになりました。そこで「このような自転車を大量生産してもらおうのがいい」と思い、大手の自転車会社に連絡を取りましたが、断られました。費用と手間がかかるだけで、会社の儲けがないからだろうと思いました。この出来事から「これは自分で作るしかない！」と世界に1つの自転車作りが始まりました。

運送会社を辞め、自分で製作所を立ち上げました。堀田さんが一人で作る自転車は、1台として同じものはありません。利用するお客さんの症状、病気、事故、年齢などに合わせて作られ、不自由なところを補い、お客さん自身が乗れるためのものだからでした。乗れるようになるまで指導もしました。日曜、祭日関係なく毎日働きましたが、自転車作りの儲けはわずかでした。その日の食事にも困る日々で、お金が100円玉1枚もない日もありました。

「もうやめるしかない」とぎりぎりまで追い詰められていたある日、北海道から次のような電話がかかりました。「小4の息子は片足が不自由です。夏休みに息子を一人で東京に行かせます。親は二人とも仕事が忙しいので行けません。1週間ほどそちらに泊めていただけませんか？」

堀田さんは空港に迎えに行きますが、飛行機の乗客たちが出てきても少年の姿が見えません。「これは騙されたのかもしれない。小4の子どもが一人で北海道から来るなんて話がおかしい。」と唇をかんだ時、松葉杖をついて、足を引きずって、ゆっくりと歩いてくる男の子が見えました。

堀田さんはその時、頭を殴られたようなショックを受けました。「体の不自由な人のために自転車を作っていないながら、自分はわかっていなかった。疑った自分が恥ずかしいし、情けない。この子は自分だけを頼って、頑張って一人で来てくれた。今まで私は仕事の意味や重さを、全然わかっていなかった。何のために自転車を作っているのか。」「この時、今までの自分ではない自分が芽生えた。」と後に取材を受けた時に堀田さんは語っています。「やはり自転車作りを続けよう。たとえどんな困難があっても、今日1日だけは決して負けないと思おう。」と決意しました。

堀田さんの業績が世の中に認められたのは60歳を過ぎてからでした。2005年にシチズン・オブ・ザ・イヤー、2007年に足立区民文化賞と吉川英治文化賞を受賞しました。2019年に、東京都足立区では、堀田さんの自転車が障がい者や難病の方が生活しやすくするための道具「日常生活用具」として認められ、自転車を買う人には補助金が出るようになりました。

このように、堀田さんの手作り自転車は多くの人に喜ばれているのです。

参考文献・資料 『風を切って走りたい！』夢をかなえるバリアフリー自転車

高橋うらら著 金の星社

第66回青少年読書感想文全国コンクール課題図書(小学校高学年の部 5, 6年生)

※先月号の保護者の方からの返信

子どもが小さな頃は、お友達もつれて父母ヶ浜の干潟でよく遊ばせました。いつも綺麗な砂浜が広がっていたので、地元の方々が掃除してくれていたのは、知っていましたが、元々ゴミが流れ着かないのだろうと思っていました。同級生3人の方の思いが、世界を動かしたのですね。なんでも人の言いなりではダメですね。自分の考えを持って、本当に大切だと思えるものは、命がけで取り組みたいものですね。地元の物語を授業に取り入れてくれて、感謝です。